

キョウチクトウ科ガガイモ属のつる性の多年草。全国の日当たりの良い草原、道端、河川敷、畑地などで普通に見られる。長く太い地下茎を持ち、その一部からでも容易に萌芽する。茎は他のものに絡んで伸び、2mほどになる。葉は、対生、無毛、全縁で葉脈が目立ち、長さ5～10cm、幅3～6cmのやや長い心臓形で先は尖る。葉面の表面は濃緑色、裏面は白緑色である。茎も葉も切ると乳白色の液が出る。

夏に葉腋から花柄を出し、集散花序をつける。花色は白色～淡赤紫色で、10～20個ほどが固まってつく。花冠は約1cmで5深裂し外側に反り返る。内側には白い長い毛が密生する。中央に雄蕊が短筒状に合着したずい柱を形成し、中心から柱頭がくちばし状に突き出す。

果実は大形の紡錘形で長さ8～10cm、表面にイボがあり熟すと片側が裂開し水平に2つに割れてカヌーのような形になる。中から長い絹糸のような白毛(種髪)を付けた長さ7～8mmの扁平な種子が出て風に運ばれていく。

日本最古の歴史書である古事記には80種ほどの植物が登場する。その中の一つが「蘿摩」で、古事記では「自波穂」「乘天之蘿摩船而」「有帰来神」と記されている。これを読み下すと「なみのほより」「あめのかがみふねにのりて」「よりくるかみありき」となる。この「あめのかがみのふね」の「かがみ」がガガイモのことであるとされる。意識すると「波頭を渡りながら」「ガガイモの船に乗って」「やってくる神様がおられた」という意味になる。

なかなか豊かな発想である。古事記の編者とされる太安万侶と稗田阿礼は、このガガイモの実の殻が二つに割れて中の種子が飛び出した後、割れた半分の殻は10cmほどのカヌーのような小舟になり、それに乗って小さい神が常世の国(神の国)からやって来たという発想を持った。そうしてそのことを国造りの神話として作り上げたのである。このことは、少なくとも彼ら以前にガガイモの果実が二つに割れるとその中はきれいで船のようになることが知られていた、ということをおうかがわせる。

そのガガイモの船でやって来た小さな神様が少名毘古那神であった。

このガガイモである「蘿摩」は全草が漢方で、果実は蘿摩子

須藤 健一

として葉は蘿摩葉として、止血、強壯、強精薬として知られている。果実の中の種髪はこれを集めて印肉や針刺しの材料、傷口を押さえて止血するなど、いわゆる綿のようにも使われていた。また、茎を折った時に出る白い乳液にはタンパク質分解酵素が含まれ、民間でイボ取りに使われたという。ガガイモそのものが漢方としての薬であるだけでなく、少名毘古那神は医薬について伝え、酒造りを教え、穀物を各地に伝えるというまさに大国主神と一緒に国造りを行って行くのである。

「蘿摩」については「本草和名」で「蘿摩子、和名では加々美という」とあり、「大和本草」では「蘿摩をカガミグサ、ガガイモという」と記載される。そのガガイモの名は、この草の果実の内側が白く光っていてまるで鏡のようだというのでカガミグサ、果実が芋のようにも見えることからカガミイモの名があり、牧野富太郎は、ガガイモはカガミイモの訛ったものであるとした。

彼らのように少し想像してみる。ガガイモの二つに割れた船の中に、白い種髪を豊かになびかせたガガイモの種子が鎮座している。波はあるが天気は良い、そんな海を、波頭を渡りながら神様が船で行き来しているのである。

